**大家族**

白川郷の経済・社会的歴史は、大まかに言えば、地元住民が利用可能な耕作地の欠如に適応してきた歴史である。同地域の一部、特に北部と南部では、耕作地の不足は、他の場所で習慣だったように後継（普通は長男）以外の子どもが家を出て自分の家族を始めるのではなく、大家族が皆同じ家で暮らし、同じ畑を耕すことを意味した。大家族が同じ家で暮らす習慣は、白川郷の人々が養蚕を主な生業とした江戸時代中頃（1603年から1837年）から明治時代（1868年から1912年）に組織化されますます発展した。養蚕には労働力が必要だったので、家族の長たちは子どもや孫たちを働かせるために家に留めようとしました。

一般的な大家族は、妻と暮らす家父長、後継とその家族、そして他の子どもたちです。娘たちは結婚しても家に残り、夫が定期的に訪問する形を取り、相続権を持たない息子も村の他の場所にいる妻を訪問しました。このシステムは衝動というより必要に迫られて作られたもので、そこには一定の個人の自由もありました。隔週に1日、大家族の中の核家族は普段の義務を免れ、自分たちの時間を持つことが許されていました。そのような日には、夫と妻とその子どもたちは一緒に時間を過ごしたり、自分たちだけの小さな畑で仕事をすることができました。彼らの生産した作物は家父長が購入し、これが核家族の個人的収入になりました。

南部の御母衣集落では、明治時代のある時点で富山家の48名の家族が一緒に暮らしていました。彼らの住居であった富山家は今は民俗資料館になっており、観光客は、1930年代には養蚕技術の発展により家族の労働力の必要性が減少してほとんど消滅してしまった白川郷の伝統的な地域社会の生活スタイルや村人の歴史を学ぶことができます。